

今日からエステル記の学びを始めます。最初の「クセルクセスの時代のことである」(1)と語られており、エズラ・ネヘミヤと同時代のペルシャのことです。ヘブライ語原文は「アハシュエロスの時代のこと」と語られていますが、新共同訳聖書は「クセルクセス王」と解釈して、名前を統一して翻訳しています。つまり、キュロスの時代の第一次エルサレム帰還と、エズラ・ネヘミヤが第二次帰還した間の出来事であることが分かります。

エステル記の特徴は、ペルシャ国内のことが舞台となっていることです。またエステル記には、主なる神が登場しません。さらに「プリム」と呼ばれる祭りが行われます(9:20-32)。律法によって定められておらず、他の書簡にも出てきません。こうしたことから、エステル記が、神の御言葉としての正典であるのかということが議論されることもあります。

しかし、民族的な危機を迎えるユダヤ人に対して、主なる神が共におられ、モルデカイ、エステルによって、ユダヤ民族が助かる、主なる神の導き、摂理を覚えることが求められています(参照：ウエストミンスター信仰告白5:1)。主なる神の導きは、私たちが教会生活を送っている時にだけでなく、教会から離れ、家庭・働きの間・生活のすべてに及び、私たちは常に神の恵み・導きの下に置かれています。だからこそ、私たちは創立宣言において告白します有神論的人生観・世界観に生きることができるのです(参照：Iコリント10:31)。

クセルクセスの時代、ペルシャはインドからクシュ、つまりアフリカ(エジプト南部)まで支配し、栄華を極めていました(4、6-7)。

そうした中、酒宴の最中、一つの事件が発生します。クセルクセス王が、王妃ワシュティを披露しようとした所、王妃が王の命令を拒みました(10-12)。ここで私たちが確認しなければならないのは、ペルシャにおいて一番權威を持っているのは誰であるかということです。ペルシャ王であるクセルクセスが、一番の權威者であり、王に従わなければ、王妃であろうと処罰の対象となり、王妃は処罰されます。当時の人たちも、そして私たちも、これが当然のこととして受け入れてしまいます。国であっても、社会における様々な組織においても、上に立つ權威者に服従が求められます。そうでなければ、秩序が乱れるからです。ある意味では、必要なことであり、正しいと言わなければなりません。

しかし「本当にそうなのか」ということも問われます。王妃ワシュティもクセルクセス王の宮殿で女のための酒宴を催していた(9)と語られ、酒宴は男性ばかりの宴席です。そうした中、王妃として披露するのはただ顔を出すということではありません。つまり、女性としての尊厳を傷つけることが行われようとしていたことを意味しています。

ここで私たちが確認しなければならないことは、王の權威は、人の尊厳(人権)を無視してでも、服従させることができるのかということです。聖書は、王であろうとも、主なる神の支配に服することを求めています(参照：ウエストミンスター信仰告白23:1)。ですからここは、王妃ワシュティがわがままを語り、王の機嫌を損ねたように読まれてしまいますが、王の權威があつたとしても、主なる神の御支配の下にあります。そのため、私たちはどのような為政者の下に生きようが、王に従う以前に、主の支配に生きることが求められています。

主は私たちが神にかたどり、神のかたちに創造してくださいました(創世記1:26)。そして、日々の恵みをお与えくださいます。そのために、王であっても国民一人ひとりの人権を尊重した上で、国を統治することが求められています。私たちは、良心に反することまで、王・為政者に従うことは求められていません(参照：ローマ13:1-5)。むしろ良心に従い、為政者に抵抗することも、主に従って生きることです。

つまり主なる神に従って生きるとは、尊厳・人権を大切に生きることとつながります。これは「わがまま」や「不服従」ではなく、主によって創造された人間の権利です。つまり王・權威者の側からすれば、人を支配するにあたって、市民に与えられている尊厳・人権を認めた上で、統治・服従することが求められます。こうした人権意識が、現在における民主主義国家において求められています。しかし同時に、人権を認められていくのには、時間がかかり、時に後退することもあります。尊厳・人権といえは、教会の働き、信仰と別のことと思ってしまうかもしれませんが、主による創造の秩序に生きる私たちキリスト者は、人権をとおしても主の御心が成し遂げられていくことが求められています。

エステル記は物語として読むには面白いのですが、主なる神が登場しません。そのため、聖書としての正典性が疑われてきました。しかし私たちは聖書の御言葉として、エルテル記を読み進むことが求められています。イスラエルの民が、虐殺から逃れるという主の御業が、主の御計画に基づいて成し遂げられる主の摂理が語られています。

私たちが手に取る旧新約聖書は、創世記の初めの3章において語られていたこと、つまり主なる神による天地創造と、神によって創られた人間が罪を犯したに対して、罪を犯した人間を、神さまはどのようにして赦し救われるかが、聖書全体で語られています。つまり言い換えますと、聖書のほとんどは恵みの契約とその実行について語られています。

このことはエステル記に当てはめるならば、罪を犯し、バビロンに捕囚の民とされて連れて来られたイスラエルの民は、今はペルシャの町スサに連れて来られ、ハマーンという一人の謀略により滅ぼされようとしている中、主なる神の恵みがエステルとモルデカイによって示され、救いへと導かれます。

今日のタイトルを「主の御業が成し遂げられる2つの条件」としました。主なる神はイスラエルの民を救うために2つのことを準備されました。そのことがこの2章において語られています。つまり一つ目は、ペルシャの一番の権威者であるクセルクセス王の王妃として、エステルが選ばれること。そして二つ目が、モルデカイが王に対する謀反を企てていた二人を見つけ、処罰することにより、モルデカイが王の信頼を得たことです。

主なる神の御計画は、人間の目には常に偶然であり、突然の出来事として示されます。しかし、主なる神にとっては御計画の内にあることであり、救いという大きな御業が成し遂げられるために、一つひとつの出来事を明らかにされていきます。

クセルクセス王は、王妃が自らの命令に従わなかったために、新しい王妃を選ぶことを決断します。王に仕える侍従たちが、王にこびへつらい計画しました。王妃選びは、公募ではなく、拒否権がない状態で行われていきます。そして、エステルが王に気に入られ、王妃として召されていくこととなります。

律法は雑婚を禁じ、ネヘミヤも異邦人の妻と離縁するように求めています。そうした中、異邦人の王と結婚することを、主は認めているのか、という問いかけがでてきます。厳密な意味においては、律法違反と言わなければならないかと思えます。しかし主の御業が成し遂げられていく段階において、主は律法に違反した行為をも用いられることを私たちは忘れてはなりません。ヤコブは二人の女性を妻とし、さらに二人の側女と共に4名の女性から子どもが生まれ、12部族を形成するイスラエルが成立されました。また主イエスの十字架は、イスラエルの民が無罪であるお方を逮捕し、有罪にすることによって、成し遂げられていきました。主はときとして人間の罪を用いて、主の御業を成し遂げて行かれます。

またキリストの誕生においても、イスラエルの家の系図の中に、異邦人ルツの名が留められています。異邦人であっても、主の民として召される人が与えられていきます。

ですから律法を拘子定規に理解するのではなく、律法違反かもしれないが、主はご存じの上で、ここに登場する人たちを用いておられることを、理解しなければなりません。

このときエステルはユダヤ人であることを伏せていました(20)。これは捕囚の民が生き延びる一つの知恵です。事実だからと、何でも明らかにしなければならないものではありません。ただこの時大切なことは、「自分はユダヤ人である」とのアイデンティティを見失わないことです。アイデンティティを見失うことにより、異邦人化してしまいます。

二人の宦官が王暗殺を計画していました(21-22)。このときモルデカイがどういう職務で、王に近い働き人であったのかは不明です。しかしモルデカイが王妃エステルをとおして、二人の謀反人を告発したことにより、モルデカイは王の信頼を勝ち取ります。

私たちが毎日の生活の中で様々な出来事を経験します。多くのことは、信仰と関わりのない所で起こることでしょう。しかしエステルとモルデカイの出来事が、イスラエル救出のために主が備えてくださった出来事でした。同様に私たちの日々の出来事も、そこに主なる神が介在しておられ、そして私たちが主なる神を覚え、主に依り頼んで生きることが求められています。主は私たちが救いというゴールに向けて日々導いてくださっています。

2章では、主の御計画によりエステルがペルシャ王の王妃として選ばれました(2:1~18)。またモルデカイは、王に対して謀反を起こそうとしていた二人の宦官を王に知らせました(2:19~23)。本来であればこのとき、王によりモルデカイが高い地位に登用されて良いはずですが、そのようにはなりません。そしてその後、王が高い地位に就けたのがハマンです。ハマンは、出世欲を持ち、誰よりも自己中心に生きていました。

ハマンはアガグ人ハメダタの子です(3:1、参照：民数記24:7、サムエル上15章)。アガグ人はイスラエルと対立しており、サウルによって滅ぼされた王の子孫であるといつて良いかと思えます(参照：サムエル上15:7-8)。そのため、ハマンも、イスラエル人であるモルデカイを、嫌っていたのではないかと考えられます。その上でハマンは権力欲が強く、すべての人に敬礼を要求しました。これが主なる神を知らず、自己中心に生きる統治の姿です。神を知らない者が支配するとき、自分の力を人々に示させるため、ときとして独裁となり、戦争へと進展します。いつの時代であっても、独裁者による戦争を避けることはできません。

こうしたことは、神を知らない者にのみ起こるのではなく、ときとしてキリスト者・牧師や教会指導者(長老)であっても起こることです。主なる神を信じると語りながら、人を愛することができず、謙遜になれず、自己否定を行うことができません。ここに人間のもっている罪があります。義・善・真実である主なる神の御前に立ち、自らの罪の姿を明らかにしなければ、キリスト者であっても、他者を虐げ、自己を誇ることが起こります。教会の中に、こうした人がいるとき、教会は離脱者が発生し、分裂することもあります。真の意味で心が開かれておらず、御言葉に聴くことができない者に対して、いくら御言葉によって語りかけたり、注意をうながしても、聞く耳を持ちません。ですから教会でも、為政者であっても、こうした人がいる場合、彼らが権力を持たせない知恵が求められます。

さて、人々に敬礼を求めたハマンに対して、イスラエル人であるモルデカイは、ハマンに敬礼をすることをしませんでした。これはモルデカイが個人的にハマンを嫌っていたからではありません。為政者に従おうとしなかったわけでもないことは、王に対する謀反人を王に知らせ、王の生命を助けたことから明かです。主がお立てくださった為政者には、好き嫌いに関係なく、従うことが求められています(参照：ウェストミンスター信仰告白23:1、ローマ13:1~5)。つまりモルデカイは、王や権威者に対して、神の民として従う意思がありました。

しかし「良心のためにも、これに従うべきです」(ローマ13:5)と語られていますが、キリスト者としての良心を否定すること、つまり主なる神を否定して、偶像・権力者に従うことが求められるとき、偶像崇拝を行ってはならず、為政者の命令であっても拒否すべきです。ここでのモルデカイも、ハマンが自らが王の代理人、そして神の如くに君臨しようとしていたため、それを「否」として、ハマンに敬礼することをしませんでした。

自らの権威がモルデカイによって失墜させられたハマンは、モルデカイばかりか、イスラエル民族を抹殺しようとしています。自己中心に生きる者は、自分を否定する者を許すことができず、他者を殺すこともためらいません。それが戦争という行為へと推し進めます。

イスラエル民族は王国が分裂し、北イスラエル王国・南ユダ王国となり、さらにアッシリア・バビロンに国が滅ぼされましたが、民族は離散し、ある者たちは捕囚の民となりましたが、主の憐れみによりイスラエルは民族として抹殺されることはありませんでした。ここに主なる神の御計画と御働きがあったからです。しかし独裁者であるハマンは、虐殺を始めます。このときモルデカイは、信仰の故の迫害として戦いに備えることとなります。それがエステルに事実を伝え、そしてイスラエル民族を守るために行動することです(4章)。

日本に生きるキリスト者である私たちは、靖国闘争を行ってきました。靖国神社国営化は、神社参拝強制につながる信仰の戦いであり、反対運動も教会あげて行いました。今彼らは神社参拝の強制を求めません。異教社会に生きるキリスト者として、私たちは彼らを知らなければなりません。私たちキリスト者は偶像崇拝を行わないために、信仰を強めなければなりません。私たちキリスト者は、ハマンのような為政者が現れ、信仰の故の迫害、戦争が起きるとき、教会が一致して反対することができるように、信仰の武具を身に備え(エフエソ6:10~18)、偶像と平和に対する備えを行うことが求められています。

3章では、ハマンが自己権威欲が表れ、王に次ぐ高い地位に就くと、ハマンにひざまずかないモルデカイとイスラエル民族を絶滅させる命令を発し、イスラエルに対する迫害が始まります。

前回も確認したことですが、為政者・王が異教徒であったとしても、主がお立てくださった権威者・為政者に従うことが求められています（参照：ローマ13:1~5）。モルデカイは、ハマンに対してひざまずかず、敬礼をしませんでしたが、それ以外のことにおいては、王に忠実に仕え、ハマンに対しても従っていたのではないかと思います。

しかし同時に、例外があることを語りました。先週は、神への信仰を奪おうとするキリスト者としての良心の自由の問題であることを語りましたが、ここでは、生命を奪おうとする悪政に対して「否」を語り、抵抗することが求められます（抵抗権）。

このときモルデカイは、この抵抗運動を自分一人で行うのではなく、イスラエルに向けられた問題として、虐殺のを知り、混乱していたイスラエルの民に呼びかけます。そしてこの抵抗運動の先頭に、王妃として重用されていたエステルにも呼びかけます。

このときのモルデカイの呼びかけは、粗布をまとして、断食を行うことです⁽¹⁾。つまり、抵抗運動は、武器をとるイメージがありますが、モルデカイは信仰の問題として、信仰の武具を身につけ、主なる神にその答えを委ね、断食を行います（参照：エフェソ：6:11-18）。

エステル記は、神の御名が出てこないことを語りましたが、粗布をまとうこと、そして断食を行うことは、明らかに信仰に基づく礼拝行為です。こうしたことから、エステル記が、正典として認められた大きな要因であるということができるとかと思えます。

現在の日本の教会では、ほとんど断食を行いません。「断食は、旧約の儀式であり、新約の時代にはいらない」と思われている方もいるかと思いますが、そうではありません。新約の教会でも断食を行います。礼拝行為の一つとして、断食を行うことは、私たちの教会の礼拝指針においても定められています。ウェストミンスター神学会議においては、毎月一日を月例断食日として定めて断食祈禱日を行っていました。ですから今に生きる私たち日本人キリスト者も、信仰の戦いに備えるとき、断食を行い、主の御心に従うために礼拝を献げることは、求められています。

そしてモルデカイはエステルに、「この時にあたってあなたが口を閉ざしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」（13-14）と語りかけます。信仰の戦いが始まる時、「自分は関係ない」という傍観者であることは許されません。あなたの信仰が主によって試されているのです。しかし同時に、誰もが同じように戦えるかと言えば、簡単なことではありません。第二次大戦中の日本の教会は、「天皇崇拝」が求められ、多くのキリスト者が、信仰の戦いを放棄してしました。

しかしこのときエステルは、ここに信仰の戦いであることを受け入れ、モルデカイの要望を受け入れます。そればかりか、三日三晩の断食を行います^(16a)。モルデカイは日数を指定しておらず、1日の断食を想定していたはずですが、しかし三日三晩断食を行うことは、それだけ事態が重大であることを認識している結果です。

また同時に、ここにおいて立場が逆転し、エステルがこの信仰の戦いを指導し、イスラエルの先頭に立つ意思が明らかになります。このことは、エステルが死ぬ覚悟をもって王の所に行くことからしても明かです^(16b)。為政者に反旗を翻すことは勇気がいることです。恐ろしいことです。それでもなお、イスラエルであることを隠して身を隠すのではなく、信仰の戦いを行うために立つことは、彼女自身の信仰の表れです。

つまり主なる神を信じることは、地上における生命が終わりを告げ、肉の死に与ったとしても、キリストが十字架の死から三日目の朝に、死に打ち勝ち甦られたように、甦りの生命が与えられ、神の国における永遠の生命と平安が与えられる確信と希望が与えられています。旧約の預言者たち、新約の殉教者たちは、殉教の死にいたるまで信仰をまっとうしました。そして私たちも復活の生命の希望が与えられています（参照：ローマ8:1-11）。

5章の冒頭には「それから三日目のことである」と語られています。三日前に何があったのかと言えば、その間、エステルとモルデカイ、そしてユダヤ人たちは、三日三晩断食をしていました(4:16)。つまり、ハマンによって企てられたモルデカイとユダヤ民族の虐殺が王の命令によって始められようとしていることに対して、主に委ねていたのです。

断食を行うとき、まず考えられることは飲食を一切断つことです(4:16)。しかしこのとき一番大切なことは、主がお語りになる御言葉に聴くこと、主の御前に頭を垂れて祈りを献げることです。このとき同時に黙想を行います。頭の中を整理することが大切です。このときモルデカイもエステルも、ユダヤ民族虐殺の命令を受けて感情的になっています。とくにエステルにいたってはこの事実を聞いたばかりです。

私たちはどうしても、神を礼拝する・断食をするその行為に注目してしまいます。しかしここで大切なことは、主が私たちに何を求めているのかを理解することです。このとき、主の御言葉を理解するだけでは、現実の問題に対する答えが出て来ません。つまり、御言葉を理解することと同時に、自分の問題に対する答えを導き出すことが大切です。聖書理解に対する適用です。これは御言葉である聖書を読めば、自動的に与えられるものではありません。ウェストミンスター大教理問答問160では、「そして〔第六に〕生活の中でその実を結ばせることです」と告白します。聖書を理解した上で、今の自分に与えられている問題に対して、主が何を求めているのかの答えを導くことです。このとき、自分で答えを確定しないこと、主の導き・聖霊の働く場を備えておくことが求められます。聞くのに早く、瞑想した上で、語るのに遅くなければなりません(参照：ヤコブ1:19)。

エステルは断食することにより、頭の整理をして、行動に移します。①王に召し出されることなく王宮に行くために、死の覚悟を行ったこと。②エステル主催の酒宴を催すことを提案し、王とハマンを招くこと。③その後のことは主の導き・聖霊に委ねること。④新たな展開(王が自分の願いを適えてくれること)に対しては、即答は行わないこと。

行動を起こすとき、大胆さは求められます。そのためにそれまでに準備をできることは、すべて準備を整えることが求められます。実際に行事を行う場合、準備が8割であり、当日行うことは2割であると言われます。しかし同時に、当日急ぎすぎないことです。相手の反応によって違った答えが出て来ます。即答が求められるときもあります。前もって想定していれば、即答することも可能でしょう。しかしそうでなければ、聖霊が働く余地が必要です。エステルの場合、王の申し出に対して、酒宴の当日に答えることで、即答を避けました。「即答すること」は素晴らしいように見えますが、このとき祈りがなくなり、主の御業が関与することなく自分の感情によって答えを出すこととなります。

私たちが毎日、生活・仕事に追われている生活の中、主の御言葉に聴くとき、日々の生活・仕事・問題に対して、瞑想のときを持ち、聖霊に委ねること、主の御心を顧みること、そして頭の中を整理する時間を持つことが、非常に大切です。主は「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と求められています。もちろん、直接、神礼拝に出ること、教会における奉仕を行うことも大切です。しかし、日々の生活における問題を整理し、主の導きを求める時間に充てることも重要です。エステルが断食することで、瞑想の時間を確保しました。

一方、ハマンはどうであったのでしょうか。王妃エステルから、王と共に酒宴に招かれたことを、エステルの思いを悟ることなく、率直に喜びます。うきうきと上機嫌でした(9)。しかしモルデカイに対しては怒りが込み上げてきました。エステルが、主に知恵を求め、解決を委ねるために断食・瞑想したのに比べ、ハマンは物事を判断するにあたり、直感的に自分の見方か敵かのみを判断し、心の思いを言葉に表し、行動に移します。彼らは、目の前の人物が、自分にとって得か損か、その判断規準しかありません。50アンマ(22m)の柱を立てることにより、自分の力を人々に誇示し、自分に反対することが損なことである、ハマンの見方に、逆らわずに生きようとする思いを持たせようとしています。

信仰者は、こうした損得勘定に生きることをしません。エステルは、自分の命が王に奪われることを覚悟して行動します。困難な道であったとしても、主の御心・主の願いを、御言葉によって聞き続け、問題を整理して、解決の道を主に委ねて探りつつ、歩きました。

エステル記を読み進んでいます。5章においてエステルが立ち上がり、王の前に出、王から「願いがあれば国の半分なりとも与えよう」と語られ、ユダヤ人虐殺に走るハマンに対して、反撃ののろしを挙げることができたと言って良いかと思えます。

そして今日の6章において、普通に私たちが聖書を読む場合、主なる神が王に働きかけ、眠ることなく、宮廷日誌を読む機会を与えてくださったこと、また王がモルデカイの功績に目を留めることができたことに注目が集まるかと思えます。

しかし今日は、まず残されていた記録に注目をしたいと思えます。つまり通常は、記録が残されていることが前提として聖書を読みます。しかし記録が残されていることは当たり前なことではなく、事実を事実として書き残す意思がなければ、記録は残されません。いつの時代でも、意図して記録に残さないことが起こります。それはその事実・決定が、残されることにより不都合が生じることを理解しているからです。

大宮教会も、定期会員総会を行うにあたり、年報をまとめました。年報や会議の記録(小会記録)は大切な記録です。こうした記録が、漏れがなく、改ざんされることなく、逸脱することがないように記録としてまとめられ・記録として残されていくことが大切です。

今の時代、スマホ・パソコンにより簡単に文書を記すことができます。そしてSNSを通じて、世界に発信することができます。そのため、多くの文書が氾濫しています。しかし、これらは記録ではありません。電子データですから、いつまでも残っているようですが、膨大な情報の中にあって埋もれ、消えていきます。私も、歴史編纂委員会の働きを行い、過去・現在発行され続けている多くの文書を記録として留めること、保存することの働きを行っています。こうした多くの情報から、必要な情報を取捨選択し、記録として残す人(アーキビスト)の働きは、重要です。

さて、宮廷日誌が残っていたからこそ、二人の宦官ビッグタンとテレシュが王を倒そうと謀っていた事実、そしてそのことをモルデカイがエステルを通じて王に伝えることにより、王の命が守られた事実(2:21~23)が、改めて確認することができました。

そしてこのとき、クセルクセス王は二人の宦官の処罰を行いました。モルデカイに対して、榮譽も称賛も与えていないことを知らされました。国を治める者・上に立つ者にとって大切なことは、国民に信頼されることです。このとき、罪を犯す者に対しては処罰し、手柄を挙げた者に対してそれに相応しい地位・榮譽・称賛を与えることが大切です。

そのために、王からの最大の榮譽を与える者に何が相応しいか、ハマンに問いかけます。このときハマンは王から榮譽を受けるのは「自分以外にない」と決めつけ、「王に並ぶ者として榮譽を与えよ」と王に進言します(7-9)。ハマンは目先のことで直感的に反応します。

しかし、一つひとつの出来事は、目の見える範囲でのみ行われているではありません。ハマンは王の心の中を勝手に判断したわけで、王に対しても、寄り添い・理解しようと思う心がまったくありません。地位・榮譽を得ようとすれば、上に立つ者の思いをくみ取り、それを利用しようとするのですが、そうした知恵すらここにはありません。つまり、一般社会の中にあって、権力者に認められようとすることもできなくなっていました。

こうしたことは、周囲にいる人々も、すぐに気が付きます(12b-13)。知恵ある者らは、今までハマンが王に次ぐ地位を得て、権力を持っていたからこそ、ハマンに仕え、自らも地位を得ようとしていました。しかし、いざハマンが落ち目になり出したら、そのことにすぐに気が付きます。ここでハマンに起こっている事実を語るということは、彼ら自身ハマンから離れていったのではないのでしょうか。

聖書は、神さまを信じ、正義を貫いていけば、常にハッピーエンドを迎えるとは限りません。むしろ信仰を貫くが故に、モルデカイの如くに、虐げ・迫害があるかもしれません。

しかし主を信じ、主が求める正義を貫き、上に立てられた権威者に忠実に仕えるとき、その事実は書き留められ、時として王によって正義が正されます。また天にあって主なる神は、そのすべてを書き留めておられ、主からの恵みと祝福に満たされます。だからこそ、様々な誘惑がありますが、どのような状況にあっても、常に主の御前であって、主を信じ、主の御心を実践する者であることが、私たちに求められているのではないのでしょうか。

ハマンにより、モルデカイとユダヤ人虐殺が実行されようとしている最中、ペルシャの王は、宮廷日誌を読むことにより、かつての王暗殺計画を未然に防いだモルデカイに、王からの榮譽が与えられることとなりました(6章)。

そして王妃エステルが主催する酒宴の二日目が、王とハマンが出席する中、始められます(7章)。このときハマンは意気消沈した状態で酒宴に出席することとなります(6:14)。一方、エステルは6章の出来事を知らずにいたかと思われまゝ。そのためエステルは、どのように王に進言すべきか、緊張の中、準備していたのだと思います。

そのためエステルは、王に進言をするにあたって、非常に慎重に、言葉を選びつつ、丁寧に語り始めます(3-4)。ここは裁判の場ではありませんが、ハマンの悪事を明らかにして裁いて頂くとしているため、裁判の場における証言と同様に、慎重さが求められます。

十戒の第九戒では、「あなたは隣人について偽証してはならない」と語られていますが、積極的に理解するならば、相手の名声を保つことが求められます(ウェストミンスター小教理問77)。

ですからエステルは、最初にハマンの名前を挙げることをせず、悪事も明らかにせず、ユダヤ民族が虐殺されようとしている苦しみを訴えます。特に最後の部分は、奴隷であることは享受しています。つまりユダヤ人は、バビロンに滅ぼされて捕囚の民とされ、さらにペルシャに連れてこられたのであり、現状の不満に声を挙げているのではないこと、つまり王に対して不平を語っているのではないことを語ります。

クセルクセス王が、ユダヤ人の苦しみを理解し、虐殺を企てている者を裁く意志を示したことにより、エステルは初めてハマンの名を出します(5-6)。ユダヤ人虐殺の勅書は、ハマンの手によって、クセルクセス王の名によって書き記され、王の指輪で印が押された形で全国に広められました(3:12)。そのためエステルの証言は、一人の証言ですが、それに裏付けられる証拠がそろっています。そのためハマンは言い逃れができません。

そのため、ハマンは王と王妃の前で恐れおののくこととなります(6)。ハマンは、王が退出したことをきっかけに、王妃エステルに命乞いを行います(7)。独裁者・権力志向の強い人は、自己中心に生きており、自らが権力を持っているときは他者に対して圧力的ですが、自らの状況が不利になると保身に走ります。自らの言動に責任をとることはせず、言い逃れをします。証拠の隠蔽をします。まさに、なり振り構わない行動です。

こうした行動は人の前では隠し通すことができることもあるかと思えます。しかし、主なる神の御前では隠し通すことはできません。主なる神は、私たちのすべてのこと、行い・言葉・心の中の隠れたことであってもすべて知っておられます。主の御前で裁き、つまりキリストの再臨によって行われる最後の審判ではすべてが明らかになります。エステル記では、ペルシャの王の背後に主なる神がおられ、王がハマンの悪事を明らかにします。

そして私たちは、主なる神の御前にあって、だれも申し開きすることはできません。クセルクセス王は、ハマンを有罪として、ハマン自身がモルデカイを虐殺して、見せしめのために立てた柱に、ハマンをつるすことにより、裁きを行います。

奨励の題を「エステルへの勇気ある証言」としましたが、キリスト教会の歴史をたどると、信仰を貫くことにより、迫害・殉教を恐れず行動した神の民が用いられ、教会は発展を遂げてきました。エステルのように、すべてが解決に向かうときばかりではなく、信仰を貫く故に、迫害・殉教の死を遂げていった多くの神の民がいます。キリスト者として生きることは、必然的にこうした対立を避けることができません。生きる目的・方向性が180度違うからです。自己中心の生活から、キリスト者になることにより、神中心に生きる者、「神に栄光を帰し、永遠に神を喜びとする」者(ウェストミンスター小教理問1)となるからです。

もちろん私たちの心は弱く、逃げたいとの思いがでてくるのも理解できます。そのため、迫害は起こるとき、信仰を歪め、王に従う偶像礼拝を行う者、独裁者に屈する者も出てきます。しかし、これで本当に良いのか、ということが問われてきます。

そもそも私たちの救いは、キリストの犠牲によって成立しています。御子の十字架の御業、最後の審判・神の国の完成の約束の故に、キリストの倣う生活を行い、苦しみに耐えることができます。信仰の武具を身に備え、主に従って信仰生活を歩もう(エフェソ6:10~18)。

ハマンにより、モルデカイとユダヤ民族を虐殺する命令を出されていましたが、この命令が王の知ることとなり、ハマンは捕らえられ木に吊されました。そして今度はモルデカイにより、王の名による王の指輪で押印された文書が勅書として出されます(7-8)。王の勅書は、エステル記では3度語られています。最初は、元王妃ワシュティが退位すること・新しい王妃を選ぶことに関して大臣メムカンにより記されたことです(1:16-22)。第二は、ハマンにより、モルデカイとユダヤ人に対して虐殺を命令することです(3:8-15)。そして三度目が、このモルデカイによって記された勅書です(8章)。

私たちが考えなければならないのは、勅書が王の名により、王の指輪で押印されていることです。つまり文書自体は、大臣や側近たちが記したのですが、その責任は王自身・為政者自身が担わなければなりません。つまり王や為政者など上に立てられた者は、語った言葉、記した文書に責任を持つことが求められます。そしてどのような文書であるべきかということは、主なる神との関係においてウェストミンスター信仰告白は、第23章「為政者について」において告白します。「全世界の至上の主であり王である神は、御自身の栄光と公共善のため、御自身のもとにあって、国民の上に立つ、国家的為政者を定めておられ、そしてこの目的のため、善良な者は守り励まし、悪を行う者は処罰するように、国家的為政者に剣の権能を帯びさせておられる」(23:1)。主なる神を信じていない王でも、公共善のため、国民のために命令を行うことが求められています。そのため命令を出す場合、慎重に、またその命令の重大性を理解しつつ、命令を出すことが求められます。

しかしクセルクセス王は、その責任を果たしていないといえます。いずれも家臣任せであり、特に第二のハマンによる命令は、言われたことをそのまま受け入れたに過ぎず、その内容の重大性に関して、王自身が判断しているとは言えません。このことは、ハマンが木に吊されると、エステルとモルデカイの言葉により、それとは逆の命令を受け入れることにおいて示されています。

次に、「王の名によって書き記され、王の指輪で印を押された文書は、取り消すことができない」(8)に注目します。王自らが判断し、重要性を理解するからこそ、その命令が成し遂げられるまで有効ですが、誰でも失敗するわけであり、また状況が変化することにより、前の命令を取り消す必要がでてくることもあります。そのため、状況が変化した時、前の命令の誤りや変更が生じた時、変更することを良しとすることが求められるのではないかと思います。権威を持つことにより、下にいる者たちは、権威に従うことが求められるのですから、権威者は責任が伴うのですが、同時に誤りがあつたとき・状況が変化したとき、柔軟に命令を撤回・変更する潔さが求められます。こうした柔軟さが、人々からの信頼を得ることができるのではないのでしょうか。

こうしたことは教会においても言うことができます。カトリック教会の司教・聖公会の主教のように、改革派教会では監督と呼ばれる人はいません。牧師が一番偉いように思われますが、牧師は職務上責任が伴うことがありますが、牧師・長老・執事が役員として立てられており、働きの違いであつて牧師が権威を持っているわけではありません。しかし、牧師・長老が会議を組織し決議を行う関係で、牧師・長老の責任は大きいと思います。しかし、会議の決定は絶対的ではなく、誤りがあれば修正・変更が求められます。

モルデカイにより王の勅令は発布されたとき異邦人がユダヤ人になる者が多く出たことを聖書は語ります(17)。中には、ユダヤ人を守られた主なる神の御力にひれ伏し、信じて、ユダヤ人になった人がいなかったとは言えないでしょう。しかし多くの人々は、信仰に関係なく、ユダヤ人である方が生きていく上で優位に働くとの思いでユダヤ人になりました。

最近では、信仰を持つこと、献金をすることに嫌悪感をもち、教会から離れる方もいるかもしれません。しかし、主なる神を信じて信仰を持つことは、このような周囲の状況、雰囲気によって流されて行くことではありません。生きて働く主なる神が、キリストの十字架の御業により私たちの罪を贖い、天国における祝福の生命をお与えくださいました。だからこそ王や為政者・教会指導者が責任を伴い、責任をまっとうすることが求められるように、キリスト者も、苦しいときでも、主を信じ、主への信仰を貫くことが求められています。

第12の月、すなわちアダルの月の13日を迎えます。この日はユダヤ人が皆殺され、絶滅させられ、その持ち物も没収される日でした(3:13)。事態は逆転し、ユダヤ人がその仇敵(きゅうてき)を征伐(せいぼつ)する日となります。新約に生きる私たちが、このエステル記9章を読むとき、ユダヤ人を迫害する人たちを滅ぼすまで行う必要があるのかと思います。

このエステル記では、神の御名が一度も出てこないことを語ってきています。しかし、エステル記全体の背後に主なる神がおられ、働いておられることを覚えるとき、最後の審判において行われる神の裁きがここで示されているとして、読むことができます。ウェストミンスター信仰告白 第33章「神の裁きについて」第2節後半は次のように告白します。

「悪人は、神を知らず、イエス・キリストの福音に従わないので、永遠の苦しみに投げ込まれ、主の御前と、主の力の栄光から永遠に絶たれることによって罰せられるからである」。

つまり、一つの民族を虐殺して絶滅させることにより自らの権威を誇示しようとすることは、人間的に可能であったとしても、主の御前には悪事を隠し通すことはできず、すべてが明らかにされます。そして旧約聖書では直接・間接的に主なる神が働きを行われます。

新約に生きる私たちは、すでにキリストによる罪の贖いが完成し、最後の審判が明らかに示されていますので、私たちの手で、「主の裁き」の名において迫害者を殺害することはしてはなりません。今、裁かれることなく、悪が君臨していても、主なる神はすべてをご存じであり、最後の審判でその罪がすべて明らかになることを、私たちは知っています。そのため私たちは、彼らの裁きを主にすべてを委ねることが求められています。

しかし旧約の時代だからと、彼らが主の名において何を行っても許されるのかといえ、そうではありません。聖書は「しかし、持ち物には手をつけなかった」と語ります(10, 15, 16)。

ハマンは、ユダヤ人の虐殺と共に持ち物の没収も命令しました(3:13)。また、クセルクセス王も、ユダヤ人が迫害者を虐殺するとき、持ち物を奪い取ることを許しました(8:11)。当時、これが当然のことでした。しかしユダヤ人はそれを行いませんでした。ユダヤ人が、迫害者を殺したのは、憎しみや自らの欲望のためではないことを明らかにするためです。

また出エジプトとの違いを感じます。出エジプトにあたっては、主はモーセに出エジプトを命じられ、エジプト人から分捕り物を取ることを命じられました(出エジプト3:20-22、同11:1-2)。そして実際に出エジプトが行われるに際して、それが実行されました(同12:36)。

この両者の違いは何なのかと考えます。大きな違いは、出エジプトでは、主なる神が、金銀の装飾品を求めるとお語りになっていることです。そしてこの背後にあるのは、エジプトにおいてイスラエルの民は、奴隷として報酬なしに重労働が課せられていました。こうしたことの代価の意味合いがあったのではないかと考えられます。

一方エステル記では、ユダヤ人はバビロンによって捕囚の民として連れてこられ、さらにペルシャに連れてこられた人たちです。完全には自由ではない部分があったのですが、ペルシャにおいては、エルサレムに帰還することが与えられ、神殿再建をすることも許されていました。そういう意味では、彼らには自由がありました。

さらにもう一つ、出エジプトにおいては主なる神ご自身が、エジプト人の財産を奪うことを命じておられます。それに対して、エステル記では主なる神の名自身ができませんが、主に代わるモルデカイ、エステルは、そのことを一切語りません。モルデカイやエステルを主なる神に代わる者とすることはできませんが、預言者のごとく理解することが、私たちに求められているのではないのでしょうか。そのため、虐殺した者たちの持ち物に手を出すことはなく、略奪者とされることを避けるためにも、「しかし、持ち物には手をつけなかった」という言葉を、聖書は3度記しているのだと思います。

「虐殺すれば、その財産を奪い取る」とする当時、当然のことであったこと、慣習であっても、主が求めておられていなければ、それを行わないことを、モルデカイやエステル、そしてユダヤ人たちは実践したのではないのでしょうか。教会においても、今まで当然のごとくに行われてきたことであっても、聖書が求めていたことでなければ、それに従う必要はありません。主の御言葉に聞き従いつつ、今の教会に求められていることが何であるかを、探り求めることこそ、私たちに求められているのだと思います。

アダルの月の13日を迎え、ユダヤ人が虐殺されることはなくなり、逆にユダヤ人を虐殺しようとしていた人たちを虐殺し、ユダヤ人たちは大きな心配事は取り去られました。

そうした中、ペルシャ王カクセルクセスの信頼を得たモルデカイは、毎年アダルの月の14日と15日を祝うように定めます(21, 28)。このプリムの祭りは、新約聖書ではまったく記されておらず、キリスト教会では忘れ去られた祭りですが、しかし、イスラエルにおいて、つまりユダヤ教においては、今でも2～3月に祭りが行われています。

今日は、御言葉そのものから少し離れ、旧約の時代におけるイスラエルの祭りについて、新約の時代、さらには教会が祭りをどのように扱ってきたのかについて考えてみます。

旧約聖書において祭りが定められています。主なる神が定められた祭りはレビ記23章において、まとめて語られています。

最初は安息日です。主の安息日こそが祝日であり、主に対する礼拝こそが祭りです(23:2-3)。日本の教会の礼拝は暗いと揶揄されることがありますが、礼拝とは喜びの場であり、祭りであるということ、私たちは忘れてはなりません。

次に主が定められた毎年行うべき祭りが語られます。最初が過越祭であり、それに続く除酵祭です(23:5-6)。出エジプトを果たすとき、主がイスラエルを過ぎ越し・救われたことにより、主が定められた祭りです。主イエスが逮捕・十字架はこの過越祭の時期でした。

次に、七週の祭り(五旬祭)です(23:15-16)。一般に、小麦の収穫を祝うために行われていました。そして、聖霊降臨が行われたペンテコステがこの祭りのことです。

最後が秋の収穫祭である仮庵祭です(23:34-35)。

これらが旧約聖書において記されている主な祭りです。

この祭りは、主イエスの十字架の後、つまり新約の教会において受け継がれたものと、受け継がれなかったものがあることが分かるかと思えます。

礼拝に関しては、キリストの十字架の死と復活により、安息日が第七日から週の最初の日、つまり日曜日に変更になり、キリスト教安息日「主の日」として礼拝を守っています。それは主イエスの復活が週の最初の日であったこそ、また8日目毎に主イエスが弟子たちの前に出られたことから、新約の教会は、安息日に変更されました。しかし、ユダヤ教やセブンスデー・アドベンチストの人たちは、今でも週の第七日を安息日としています。

また過越祭は主イエスの復活をお祝いするイースターに、七週祭は聖霊降臨祭として、継承しています。

しかし仮庵祭は、収穫感謝祭として行うこともあるかと思えますが、教会としては旧約の祭りを引き継いでいません。ただ10月31日の宗教改革記念日とその時期にあたっており、この時期いまでは異教的な習慣としてのハロウィンが行われています。

新約の教会においては、主イエスのお生まれになられたクリスマスをお祝いしています。ただ聖書にその時期が記されていないことから、西方教会と東方教会では日付が異なり、厳正な意味において、教会においてクリスマスをお祝いすべきかどうか、議論となります。そのため、ウェストミンスター神学会議(1643-49)では、クリスマスは聖書が定めていないということで、その日をお祝いすることなく、続けて会議を行っていました。

最後に確認するのがプリムの祭りです。旧約聖書の祭りの中で、安息日・三大祭りとの違いは、主なる神の命令によって行われている祭りか、ユダヤ人が自発的に行っている祭りかの違いです。つまり主が定めた祭りは、イスラエルの民の救いに関わることで、主が定め、その多くが形を変えて新約の時代にも引き継がれました。しかしプリムの祭りは、ユダヤ人たちにとっては忘れてはならないこととして祭りが行われますが、しかし主はここで祭りを行うことを求めませんでした。そのため、新約聖書において、まったく言及されることなく、新約の教会では引き継がれませんでした。

カトリック教会では、「神の母聖マリアの日」や諸聖人の日が制定され、祝祭日と定められています。これらは非聖書的であり、私たちはお祝いをしません。

私たちキリスト者が、祭りとして喜びを共有するのは、主による救いに関わること、つまり礼拝、そしてクリスマス・イースター・ペンテコステだけです。